

# 岩倉と高等学校

下村をさむ

昭和二十三年、新制高等学校が充足してあまり日も経たぬうちに、岩倉移転の噂をちらほら耳にすることがあった。まだ雲をつかむような話で他所事としかひびかなかったけれども、あんまり賛成の声は聞かなかつた。「岩倉という所は不便なところで、電車は少ないし、校舎はおんぼろ、雨が降れば忽ち洩り、床はぶかぶかで……」などとおっしゃって顔をしかめる先生もあつた。それが秋には話が具体化し、翌二十四年二月、高等学校自身が岩倉移転を決定してしまつたのである。

当時の岩倉はまことにのんびりしており、学校の周囲は田んぼや畠で人家もちらほらあるばかりであつた。そこへ理想に燃えた先生や生徒が大移動を果たしたのである。なお事務職員の方たちは、岩倉に近い人々即ち約半数が経専からそのまま高校に残留された。移転を終えた学校は、苦勞して成案を得ていた、科目選択の自由と、出席の三・一制度を打ち樹てて教育の基本方針を固めた。生徒たちは勉学の自主性と自由を与えられかつそのきびしさを自覚せしめられたのである。経済専門学校からそっくりひき継いだ樹徳館は噂に違わずお粗末で、正確には分らぬが木筋コンクリー

ト建てとでもいおうか、剝落した部分には木がむき出しに覗いており、渡り廊下は雨洩りはするし、無論チャペルはなく講堂があつて、それがチャペルにも体育館にも使われた。それに追い討ちをかけるようにジェーン台風の襲いかかつたのが二十五年のことであつた。ともかくも何とか手を加えながら辛棒したのが二十年代で、三十年チャペル、ついで翌年に理科教室（理科教室は移転後間もなく建つが三十年に炎上）、三十四年には、鶏鳴館、桑志館と次第に面目を改めてゆくのである。遡つて二十五年、鳴物入りで一年生は共学となる。女子の受け入れに、控室やトイレの設置で一採みし、運動会には女子に突き上げられたりしながら、年々共学は板についてゆくのである。二十七年度の一年生からは、科目履修はほぼ固定化し、授業はホームルーム単位に行われることになった。いわば一種の逆行現象である。以後、変遷はあるが、一部の選択が認められるのは大すじにおいて極端な変化はない。三十四年、鶏鳴・桑志の二棟の建つた時が高校の主体の、南から北への移転の時といひ得る。普通教室、教員室、校長室、保健室、事務室などは、鶏鳴・桑志両館へ移転した。しかしなが

らまだ旧校舎は残存しており、一部クラブ活動に使われたりした。三十八年には、醇化館（標本館）を東に移してそのあとに柏心館を建設して管理部門が移り、四十一年には体育館が建った。この時に及んで、遂に旧校舎は岩倉の地上から完全に姿を消し樹徳館の名をとどめるのみとなるのであるが、つい先年には、柏心館に三階が出来て視聴覚の施設さえ完備した。

学校をとりまく自然は生徒たちをのびのびと育て、ゆたかな個性や情緒をはぐくんだと思われる。人間形成途上の最も大切な時期の少年たちにとっては、まことにめぐまれた条件というべきであった。二十年代の運動場は旧校舎の南の、今のラグビーグラウンド、整備は不十分で、草は茂り黄芎蒲が美しく咲いた。東には高商時代に掘られたプールが池と化して、その周囲の草の上に生徒が腰を下ろして弁当を食べる姿が見られた。この池を歩いて渡り約束の五十円とかを友人からせしめた男がいた。一年生であったと思う。池の魚を釣ったり鮒を手づかみにするものもいた。秋になって藁塚が出来る時分に藁を燃やして芋を焼いたいたずらがあった。泥棒か何かと間違えられて、見上げる先生の顔へ、校舎の天井裏から煉けた顔をお目にかけて生徒もいた。蛇などはいくらもいて、好きな少年は両手につかまえて見せびらかした。つかまえている蛇を地面にちょいと離すのである。蛇はあわててひょろひょろと逃げる。それをまた、ちょいとつかまえる。得意満面である。先生は苦笑するほかない。今日では動物愛護に反すると叱られるであろうが――。ただし蝮もいたので油断は出来なかった。旧正門の前を流れる溝川にはいつもアカコがいたし、

蛙やザリガニはたえず生徒たちの実験材料(?)となった。もっともとうるさい悪魔もいた。蝸である。被害者の大部分は女生徒であった。共学第一回の女子が已に被害をうけており、三十年代中葉は、それが最も甚大であった。私なども父兄から、「うちの子の脚を見てやって下さい」といわれたものだ。蝸は主として岩倉川、遠くは高野川から飛来するというものであったが、これの撲滅のために、労を惜しまず数年以上にわたって除虫剤撒布の奉仕をつづけて下さった、本校の職員の方を忘れてはなるまい。今は、川がその頃よりはよごれて、殆んど蝸の噂を聞かなくなっていた。又、これは知らない方もあると思うが、学校が田水を供給していたのである。岩倉校地には小さな池があつて水が湧いていたという。キング寮の南にも水の湧くのが見られた。それを南の田んぼに引いていたのである。同志社高商創建当時の約束とやらであったが、そして農家にとっては死活問題であるが、一面、いかにも牧歌的なほほえましい話ではないか。校地の整備で湧水は殆んど消滅し、農家の権利確保のため川水を汲みあげるポンプを同志社が設置して今日の結末を見るのである。

高等学校の大きな特徴としてスクールバスが通ったことも今は昔の話である。スクールバスの運行は岩倉移転の条件であった。それが間もなく独立採算でピンチとなり、四苦八苦しながら四十年初頭までつづいた。生徒の委員が自主的に運営した。はじめは三コースで、のち二コースとなる。四条大宮から西大路、北大路を経由するものと、京都駅発、三条京阪經由のものである。八幡前から同志社への一本道を電車通学の生徒の大群集が移動してゆ

く。そのうしろをバスがのろのろと蹤いてゆく珍妙な景色は岩倉ならではのものではなかった。

高校卒業生なら誰もが厄介になった、トイメン、こと三福は、今も旧正門のありしあたりに健在である。移転当時はその二、三軒北に梅のやというのがあった。うどんや風で、表がトイメンのようにオープンではなく外からは見えぬつくりの飲食店で、やんちゃが多く屯したようであった。この二軒の間のあたりにあった小野という洋服屋は間もなく店をたたんだようだが、梅のやもいつの頃からか姿を消した。そして、いま少し南にふもとが生れ、ずつと後になって、職員だった新田のおぼさんの家が宝というお店を出し今日に到っている。学校に最も近いゆえか、トイメンに劣らぬ繁盛ぶりである。

二十三年、運動会において、相国寺の竹を伐り出して生徒机をしぼりつけ、担任をのせて運動場を走り廻ったハプニングは、岩倉移転の翌二十四年は、危険を主たる理由として禁止された。懣憤やる方なかった生徒たちは、二十五年には再開の許可をかちとるのであるが、はじめ「仰げば尊し」といいやがて「ドンチ」と呼ばれた。この山車は担任をかつぐということのほか、青春の饗宴ともいべきやむにやまれぬものがあったと思う。従って初期のドンチは山車は原始的であったが生徒たちの強い燃焼があった。三年生が各クラス毎に山車を作り担任をのせて運動会にかついで廻るのである。担任にちなんだテーマのものが多く、三十年代になると、山車に趣向を凝らすのみならず、クラス全員の扮装にも力を入れ、ドンチソングまで作られるようになった。岩倉の

大自然の中でドンチをかついで走り廻る爽快さは、若者たちにとって筆舌につくしがたいものだったにちがいない。やや後に生れたドンチファイアなど、岩倉の空をあかあかと染めて、それは、今なお卒業生の語り草となっている。それが、年々大型化し精密化するにつれて、日数を要し費用がかさんで来た。素材さが減じてショウ的な色合いも出てきた。そして、三十七年、事故発生を契機としてとうとう禁止の憂き目に遭ってしまったのである。

さて、四十一年に国際会館が完成してからは、岩倉は急速にひらけ始めた。市バスの導入は生徒の通学の便のみならず、住宅地としても価値が上昇、四十五年の区画整理と相俟って開発の度が高まり、今日の姿が現出するのである。高等学校が南から北校地に移動してから已に十数年を閲した。昔、草茫茫々であった北校地は今や立派なキャンパスとなった。チャペルの北のすばらしい櫺の並木はここ十年のたまものである。

時は移り人は変わっても、わが同志社高校の教育の基本は変わるべくもなく、そして東の空には美しい比叡が聳え、西には澄み透った岩倉川が潺湲と流れているのである。

付記

ついでながら申し添えると、最近高商関係の有志の方々により、旧正門付近に、「同志社高商之跡」という石碑が建立された。上野総長の筆になるものである。高商OBの方々、すっかり変貌した岩倉校地に驚かれるであろうが、この石碑の前に立ち、今も亭々とそびえる櫺を仰いで往時を偲ばれたい。

(高等学校教諭・国語)

## 地歴部の岩倉調査について

### 一 最 芳 秋

同志社高校地歴部は、これまで三次にわたって、岩倉地区の総合調査を実施し、それぞれの成果は文化祭に発表され、研究誌『めばえ』に集約された。すなわち、第一次は昭和三十五年度（『めばえ』二十四号）、第二次は三十七年度（同二十六号）、第三次は四十七年度（同三十五号）である。公表のつど、学内外に好評を得、京都新聞などにも採り上げられ、内容紹介されたこともあった。

第一次および二次調査報告では、その内容が人文地理編と歴史編とに分けられている。

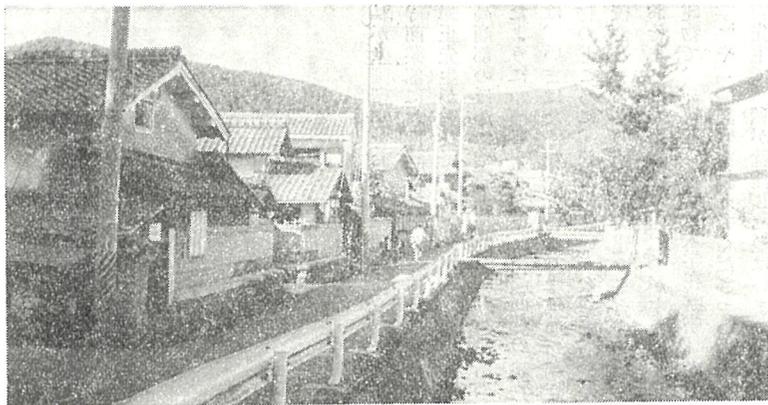
まず第一次の人文地理編では、岩倉の概況・位置・地勢・面積および地目・人口・交通の諸項目について述べ、歴史編では、岩倉の地名起源に始まって、心光院・実相院・大雲寺の諸寺院について説き、岩倉関係の古歌や年表を掲載している。また当時洛陽病院院長山本寿氏の談話形式によってではあるが、岩倉の豪族山本氏にスポットを当て、埋もれた地域史の発掘も行っている。

二年後の第二次調査は、その報告内容でみると、人文地理編で岩倉の生活および気候の項目を設け、簡単な説明を付け加えて

いるほかは、第一次の場合と大差ない。しかし歴史編では、まず各大字（明治二十二年までの村）について解説し、ついで石座神社や長源寺など前回に説き及ばなかった数神社について述べ、史跡として岩倉具視幽棲旧宅や栗栖野瓦窯跡などがとりあげられている。さらに里子制度や精神医療とのかかわりにおいて岩倉の風俗・習慣について説いている。つまり歴史に関しては承前の形をとり、第一次の続編と見なすことができる。なお、両次とも人文地理編で、明德小学校の協力によって得たアンケート分析で、地域住民の生活実態や意識の把握に意を注いでいる。

このように、第一・二次調査がほぼ同一の目的とフレームワークで行われたのに対し、第三次調査では、従来の二大支柱の一つであった歴史関係を全く省略し、現状の実態分析に視座を置いた。すなわち、人口の急増現象に伴う住宅・交通・公害および環境に関して、住民・業者・市の三者に意見を求めて、変貌著しい岩倉地区の諸問題にアプローチしている。

たとえば、すでに多くの住民によって指



岩倉川沿いの土塀と家並み

摘まれていた岩倉川汚染を採り上げ、その発生源の工場を訪ね、業者に「汚水の原因になっている」との発言を引き出したうえで、中小企業と公害・水質規制の問題点を追究している。また当時、裁判ざたとなっていた養豚場についても、業者の意向を聞きただすとともに、住民運動のあり方を模索している。

一方、交通問題に関して、一日百本以上ある市バスは、その路線が南に偏しているため、岩倉住民にとっては余り利用されていないことを明らかにし、住民が強く望んでいる北部住宅地への乗り入れについて、市当局の挙げるその困難な理由を報告している。

さらに、他の京都市域からの転入者が圧倒的に多いこと、新旧住民に対立的な意識差があること、買い物物の不便に対する不満が大きいことなど、いずれもアンケートの分析で明らかにした。

なお、今後のアンケート調査は、面接によって遂行された。児童・生徒を通じてのアンケート調査には批判と不満を抱く家庭が多くなったとの釈明が、これまでの協力

校明德小学校からあったからである。部員諸君はベアを組んで、夏休み中の炎天下、時には雷雨に打たれながら一軒一軒訪ね歩き、延べ三百六十世帯の聞き取りを行った。その労苦と哀歎のほどは、同誌の編集後記に吐露されている。

以上のように、第一・二次調査が回顧的説明を志向したのに対し、第三次調査は明日の岩倉づくりの資料を目指したものであったということができよう。前者は宝ヶ池の地に国立京都国際会議場の建設決定をみた時期であり、後者は激しい都市化の波頭が岩倉に押し寄せていた時期であった。

いずれにしろ、これまでの三次にわたる調査結果は、今後の文字どおりの総合調査にとって貴重な礎となるであろう。

最後に、当地歴部は、新制高校の発足とともに誕生したものであるが、その昭和二十三年四月以来、ほぼ二十二年間にわたって顧問を務められ、輝やかしい伝統の育成に尽力された駒井義明先生は今なお健勝で、京都外大にて教鞭を執られていることを申し添えておきます。

(高等学校教諭・社会)

## 同志社高商氣質を語る

原 猛 雄

私が米國留学をおえて、同志社専門学校高等商業部にお世話になったころは、海老名弾正先生が総長で、同志社専門学校には、高商部のほかに英語師範部というのがあったように記憶する。そして高商部の建物

は、いまはなくなっている神学部の新館建物のところに、徳照館という木造二階建の校舎と、いまの明德館が建つまえの細長いおそまつな木造講義室の二つが主たる高商建物で、部長は、私も大学在学中『商業学』や『簿記』を教えてくださった中川精吉先生で、私が就任したのはいまはもう判然とした記憶はないが、ちょうど高商の三

回生の卒業生を送りだした直後で、いままお元氣だと聞いている牧治雄先生と川村得三先生のお二人を除くと、私以前の先輩教授は全部亡くなってしまっておられる。

私は『同志社時報』のご要請で『高商氣質』、スクール・カラーを書くので、過去を回想していわゆる高商氣質の由来や、性格特質ができたことがった事実<sup>質</sup>に直接、間接に關係を持ついくつかの秘史を述べてみようと思う。

その秘史の一つは、高商部には今出川キヤンパスでの教育実施の時期から、岩倉に新校舎を移転して昭和五年に『高等商業学

校』と改称された時期まで、部長、専任教授、助教授、専任講師で構成した『教授会二部会』というのがある、それに対応して『教授会』があり、大学経済学部の、例えば宗藤圭三先生（統計学）とか、故人の黒川芳蔵先生（金融論）、松山斌先生（交通論）などが、この教授会に兼任教授として出席されて、審議の決定に参加されていた。この事實は、『高商部』は、いわば大学経済学部のエキステンション・スクールで、幾人かの大学教授が参加しなければ、高商部は単独で運営できないという過去の歴史があったからである。しかし高商側の専任者にしてみれば、自分たちだけでやってみせるという意地があったから、『二部会』という名目で、中川部長を軸に、いまは故人の鈴木隆輔教授（商業通論）と野淵昶教授（英語）が補佐役として、教育上の重要案件、専任教員の採用、担当教科目の決定その他の事項を、あらかじめ二部会の総員で決定しておいた上で、経済学部の兼任教授を含む名目教授会に上提の上、最終決定するという形式をとっていた。

この『二部会』組織運用が、当時の学生

の高商気質にどのような影響を与えていたか、もちろん高商専任教員のこのような仕組の存在は、学生の知るところでなかったし、直接何の関係もなかった。ただ二部会構成教授陣は、高商独自の教育に熱心で、研究発表などをよくおこなって、相互に切磋琢磨することを怠らず、岩倉移転後の昭和五年に、高商部は鷲尾健治先生を山口高商からお迎えして、『高等商業学校』に昇格させるまでに、最近よく発展途上国が先進国に対し、国富や文化などの面で、『追いつき、追い越せ』などという標語のように、高商専任スタッフが学生諸君に、熱心で充実した授業をいつも心がけていたことに対しては、学生は満足していたのだと考へる。

さて『高商気質』の解釈は、一口でいえば質実剛健の自主的自活志向で、内外に高商の存在を誇示しようとする若者らしい気風といえよう。よく今出川の諸学校学生の一部分たちが、岩倉の学生を、『岩倉の狸』と村八分的観察や処遇をしたのは、とても不公正で、その沿革は今出川時代に芽ばえたものでなく、いまは故人の西村金三郎学

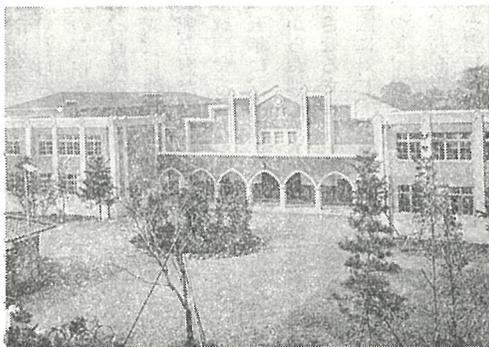
園理事や小林正直氏（高商に図書館を寄贈する。三井物産常務）をはじめ、高商全教職員や全学生たちの懸命な募金の成果として、岩倉移転後中川先生の部長時代から、鷲尾新校長の高等商業学校時代にかけて発育した新校風と考へる。

ところで鷲尾先生といえ、大工原銀太郎先生が総長の時代に、山口高等商業学校の現役校長として見識のすぐれた有名校長で、かつ熱心なキリスト教徒で、当時彦根高商の矢野校長、長崎高商の稲垣校長と並んで、クリスチャンとしてこの三先生は、文部省でも高くその教育手腕を評価していたと聞く。

『寒暑榮枯天地之呼吸也 榮辱苦業人生之呼吸也』これは鷲尾先生が昭和十二年に胸部疾患で、近江八幡のサナトリウムに転地療養にゆかれる直前に、私に書いてくださった貴重な軸書で、この文意をよく味わってみると、先生が天地創造の神の啓示と、人間生命の尊厳を確信され、いっさいを神の慈愛のもとにいきる信仰をいだいての闘病のご心境に、深い感銘をおぼえずにはいられなかった。

鷲尾先生のご在任中で、心痛された問題の一つは、例の『神棚事件』だと考へる。

しかし私は、この事件は、鷲尾校長と時の宗教部長であり、また剣道部長であった故喜多直之助教授（交通論）の、慎重でかつまじめなキリスト教精神による剣道部員への説得で、時局が日中関係を悪化させ緊迫した日本の世相のなかで、ともすると学校紛争への発展を見せるなかで、全学生の主張、思想言動の混乱を見ずに問題を解決できたことは、不幸中の幸いで、校長をはじめ喜多教授の信仰と、全高商教職員の見識ある慎重な善処による結果であった。この事件は、剣道部員が三宅八幡の神符を道場の神棚にまつて、選手一同が朝夕これを礼拝した事件で、現在のマスコミ時代なら、一躍教育上の大問題に発展するできごとであったし、当時配属将校が日本精神堅持と軍事訓練を実施していたきびしい時期で、私が二、三の学生から聞いた話では、三浦中佐（高商配属将校）が、わざわざ三年の全学生を三宅八幡に引率して、君たちの神さまはこの神霊だからよく憶えておけ、といいきかせたというのであった。



同志社専門学校高等商業部

高商気質を同志社学風のなかで、特異なものにした具体的な例は、帽子の記章制定である。これは鷺尾先生の発案で、同志社の三葉のクローバは歴史があつて非常にいいが、モールが小さすぎて若者の帽子の記章には適当でない。もっと輪郭を大きくして同志社学生のプライドを表示するようなものにする必要を感じる、として銀色のクローバのまん中に『高商』（のちに経専）という金文字をいれたものに変えることを強

調され、当時の総長、湯浅八郎先生の統轄される全学園部、校長会の席上で、この記章変更を提示され、全員のあまり積極的な支持を得られないまま採用されたと聞いていた。鷺尾先生は、全学園の統一歩調の解積からは問題を残したとしても、高商学生の評判は非常によく、プライドを持って全学園中の高商意識を高めたという良い意味での自治評価は、私は大きいと考える。

昨年の秋、八瀬平八で『高商ラグビーOB会』が開かれ、数十名の旧ラガーが参集して楽しいひとときを持った機会に、私も招かれて旧交を温めたが、その席上で、もしこの会合が、予科出身者を含む『同志社大学ラグビーOB会』であつたなら欠席しただろうという意見の卒業生が相当にいた。彼らOBの現役時代の敵は、関西学院高商チームでも、どこでもない。われらの勝負相手は同志社大学予科チームであり、予科打倒が最大の念願であると彼らは考えていた。大学予科を特にマークした条件にはいくつもの理由があつて、年齢がほぼ同じであることや、当時の高商受験者数が、はるかに予科受験者数より大きい率を示し

ていたことなど、野球部、庭球部、柔道部、剣道部、相撲部その他も予科チームよりは勝れていたと私は考えていた。私は、予科生の学力や智能程度は、接触がなかったので知らなかったが、高商生の能力程度は、彼らが当時の官公立の一流高商に対し、常に智能的、体力的に追いつき、追い越せの気魄が充実していただけに、私はスポーツでも、学業でも、特に当時の日本軍需産業の拡大方向で、企業にしたいに活気が見られた関係で、高商級の卒業生の就職状況もよく、私も多くの企業先で『同志社高商』卒業生の優秀なことを感謝されて、大いに肩身をひろくした経験があつた。

『洛北青年同盟』という中川 裕君（昭和七年高商卒業）を団長とする、自肅的団体が高商にあり、同志の人数など、私はその同志の集会などに出席した経験がないのではつきり把握していなかったが、いつも紋付羽織に袴をつけて威儀をただし、教室での学習態度など模範的で、今日の言葉でいえば、国粋思想の持ち主の団結と考えられるであろうだけに、当時ひそかに台頭しかけていたマルキストの左傾学生の暗躍を、

高商内では抑止していた。

最後に、宗教部の活動と高商気質について触れておこう。幸いなことに、当時の宗教部は敬虔な信仰の厚い喜多直之助先生をいただいでキリスト教の宣教活動であったし、校祖新島襄先生の遺訓による“One purpose, Doshisha, thy name”の一の偉大な目的、すなわち良心を手腕に運用して、人類共通な永遠の幸福、平和に活きる人材を育成することを念願して、求道活動集会を開き、高商は、今出川の全学園キリスト教集会から孤立してただけに、鷲尾校長や喜多教授の神の啓示によるキリストの愛の精神の昂揚になみなみならぬ努力が傾倒され、この崇高な精神の上に高商気質を築きあげることに最大の努力がはらわれていた事実を忘れてはならないと考えるし、現にクリスチャンではなくても、良心を自分の企業や、文化社会に活かして活躍している幾多の高商出身者人材の存在を見て、私は校祖の教訓のいまなお不滅であることを深く感謝している。

(同志社大学商学部名誉教授)

## 高商跡記念碑について

五十歳以上のかたなら同志社にもかかわらず高等商業学校があったことを記憶されているであろう。この高商も、戦後の学制改革で廃校となり、三十年が過ぎた。

高商の跡には近代的設備を誇る同志社高等学校があり、当時の高商をしのぶものは何一つない。卒業生のなかにいままも財界などで活躍するものがいるが、その数もだんだん少なくなってきた。高商が設立された昭和三年、建設に全学生が募金して協力したが、当時の学生が中心になり、せめて「われわれの在世中」に高商の思い出を残そうと持ち上がったのが記念碑を残すことだった。一昨年初、記念碑建設委員会が設立され、高商に学んだものに広く呼びかけたところ、共感を呼んで、たちどころに三百八十万円の募金ができた。

学校法人同志社の仲介で同志社高等学校に記念碑建設用地の提供を求め、昨年夏工事着手、同九月二十三日同志社大学樹徳会の年次大会と同じ日の朝、「高商跡の記念碑」の除幕式を行なった。

同志社九十年史を開いても、同志社高商の歴史はわずか数行でかたづけられて

いるが、今回記念碑ができたことにより高商があった事実がはっきり証明され、同志社百年の歴史に一そう重味を加えることになったわけである。

高商跡の記念碑は、岩倉大鷲町のバス停から北へ二百メートル道路わきに建てられ、道をへだてて向かいに食料品店がある。ここが高商の正門のあったところ。いまは高等学校体育館との間にフェンスと生けがきで仕切られ、およそ百五十年たったクスの老樹が茂っている。

記念碑は地上一・八メートル、幅は広いところで六十センチ、厚さも六十センチの紀州産の自然石で表面は上野総長の筆で「同志社高商の跡」と記し、裏面には建設委員会代表の氏名と五十二年九月これを建てると刻してある。

碑の左右には大小二つの役石を配置し、左側の銘板には高商建設の由来を記入、敷地の周囲はイヌツゲを植え、人の出入りできないよう鉄の波柵を配している。

(同志社大学樹徳会・船越精之助)